原著

絵本における「比喩的表現」

－「大きさ」の比喩的表現を子どもはどうとらえているか－

堀川真[1),*]，今野道裕[2)]

[1)]旭川福祉専門学校，[2)]名寄市立大学短期大学部児童学科

【要旨】絵本には，比喩的な語彙の使用が多い。それは文学的な表現であるだけでなく，対象者である幼児の内容理解を促進するために用いる場合もある。その際，対象者であるこどもの認識，知識，語彙にあわせた表現の配慮がなされる。絵本を作る側にいる者として，その比喩をどのような理解しているのかを，「ちいさなもの」「おおきなもの」を表現した絵本テキストを読み聞かせ，その大きさを幼児に行動で示させることで，比喩的表現の理解程度を検証した。

キーワード：絵本，幼児理解，比喩的表現

Ⅰ．はじめに

現代は，出版物やテレビ，インターネットといった各種のメディアを通じ，興味の持てる情報や物語を手に入れやすい環境にある。しかし，そのすべてが子どもの理解力に対して配慮があるとは限らない。とりわけ大きさについては「m」「cm」「mm」といった単位を含む数字にて記述されていることが多く，こうした表現は，小学2年生の算数にて習得するものであるため，未就学の子どもにとっては理解が困難である。また，その図版においても実寸で表示されていることは少なく[1)]，実物大にすれば全体像を提示することは出来ない[2)]。

では，未就学児に対して，ものや生きものの具体的な「大きさ」を伝えるには，どういう表現が適切だろうか。通常子ども向けの絵本ではそうした点をふまえ，身近なものを用いたテキストや図版による「大きさの比喩的表現」によって，伝わるかたちに置き換えていることが多い。例えば，テキストにおいて「豆つぶくらい」[3)]という形容をしたり，図版においては「ヒヨコと子ども」[4)]といった比較図で示したりするといった表現である。テキストにおけるこうした形容は，文学的，詩的な言い換えという側面もあるが，そのような手法によってものの大きさがイメージできるよう，対象者の認識，知識，語彙にあわせた国語的な表現の配慮がなされているものである。しかし，こうした平易さを心がけた大人からの配慮が，実のところ子どもの中でどのような像を結んでいるのかを計ることはできない。絵本の送り手とのおおよその共通理解もあろうが，伝えたい大きさのどの程度が実感として伝わっているのであろうか。

本稿は，こうした絵本における「大きさの比喩的表現」が，受け手としての子どもが適切な大きさで第三者に伝えることが可能かを通し，送り手が意図したように理解しているかどうかを，今回取り上げた絵本の対象年齢となっている年長児，年中児を対象として検証，考察するものである。

Ⅱ．実験

１．実験１「小さなもの」についての検証

１）使用した絵本とテキスト

『いっすんぼうし』（石井桃子文，秋野不矩絵，福音館書店）[5)]

4ページより「それは　ちいさい　ちいさい　おとこのこで，からだのおおきさが　おやゆびくらいしか　ありません」（図1）

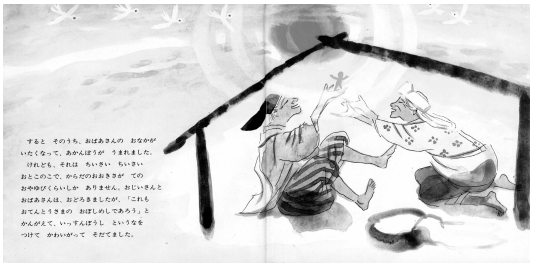

図1.『いっすんぼうし』p.4

2014 年 10 月 31 日受付：2015 年 2 月 19 日受理

＊責任著者

住所　〒070－0036　北海道旭川市 6 条通 2 丁目 3119 番地

E-mail：YQW10364@nifty.ne.jp

（図2.　図1/部分拡大図）

２）用意したワークシート

A4判の紙に，4例の男の子の絵（図3）。

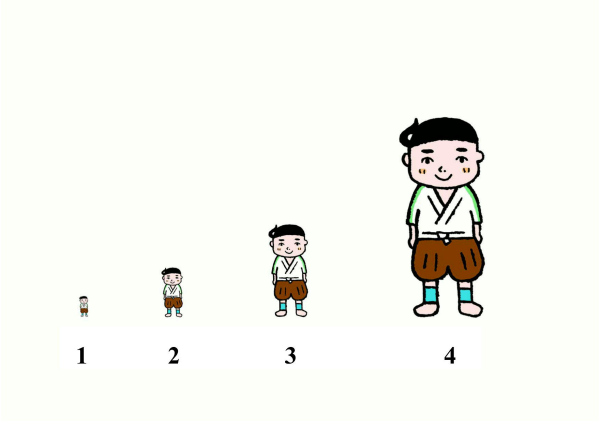

図3. ワークシート

4例のサイズ

「1」1センチ　　4ページに描かれている絵の実寸。
「2」2.5センチ　　年少児の親指大のイメージ。
「3」5センチ　　年長児の親指大のイメージ。
「4」10センチ　　4ページにおいて手のひらとの対比で推定される大きさ。

３）方法

4ページを見せて，抜き出した上記のテキストを朗読後，「親指くらいの男の子って，どの子だと思う？」と質問し，ワークシート上の一つを選ばせた。

対象：旭川市内保育所　年長児（5歳～6歳）　7名，
　　年中児（4歳～5歳）10名
実施時期：2014年10月

４）結果

ワークシートの意図は以下の通りである。

「1」極端に小さく，「小さい」という言葉のみを強調して理解している。または，テキストに理解が及ばず，絵の実寸として描かれている大きさに影響を受けたと考えられる。
「2」テキストを理解している。
「3」テキストを理解している。
「4」テキストにある「親指くらい」という大きさを意識せず，絵にあった対比から推定したと考えられる。

２．実験２「大きなもの」についての検証/その１

１）使用した絵本とテキスト

『どうぶつえんガイド／カメはおうちをしょっている』（あべ弘士／「かがくのとも」福音館書店）[6)]

9ページより「ペリカンは　とても　おおきい。はねを　ひろげると　これくらい」（図4）

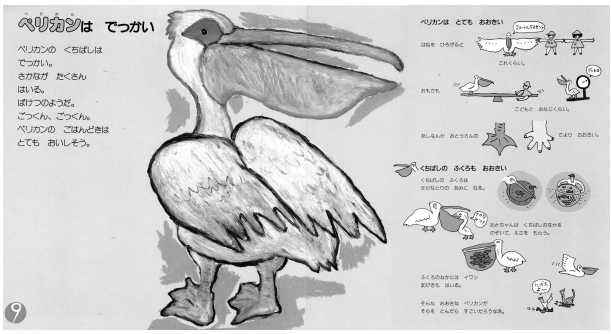

図4.『どうぶつえんガイド／カメはおうちをしょっている』p. 9

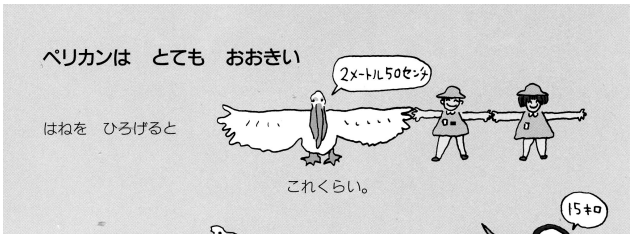

図5.　図4/部分拡大図

２）方法

9ページを見せて，抜き出した上記のテキストを朗読する。次に手をつないだ子ども2人とペリカンの比較図（図5　「2メートル50センチ」の表記あり）を指示しながら，「ペリカンは，この絵みたいに子どもが2人，手を広げてつないだくらいの大きさなんだね」と図版を解説する。その後，床面や机の端を起点に「それって，ここからどのくらい向こうへ行く大きさかな？」と問いかけ終点を指示してもらった。

３．実験 3「大きなもの」についての検証／その 2

１）使用した絵本とテキスト

実験2と同じものを使用した。

２）方法

9ページを見せて，抜き出した上記のテキストを朗読する。次に手をつないだ子ども2人とペリカンの比較図（「2メートル50センチ」の表記あり）を指示しながら，「ペリカンは，子どもが2人手をつないでいるのと同じくらいの大きさなんだって」と言葉で確認する。そして実際2人の子どもに手をつないで立ってもらい，「これくらいの大きさになるんだね」と確認してもらう。

その後床面や机の端を指し，「それって，ここからどれくらい向こうへ行く大きさかな」と問う。

III. 結果と考察

１．実験１の結果と考察

実験1の結果は表1の通りであった。

ほとんどの子が「2」と「3」を指示した。

時おりワークシートに親指をあてたり，親指を立てて見比べたりする様子も見られたが，皆それほど迷わずに答えた。子どもたちに絵本を開いて4ページの絵を見せ，テキストにある比喩的表現を伝えたとき，子どもたちは目にする絵の大きさより，テキストに従った理解をしたと考えられる。つまりビジュアルとして受けとめられる大きさより，テキストによる国語的な表現を優位にとらえているといえよう。

大意をビジュアルでつかみ，テキストで精度をあげた理解をする。通常，絵本の制作手順としては，テキストが先行する。それを受けて描かれる絵は，テキストを生かすよう揉みあいながら，一冊の絵本というものになっていく。本書においては，送り手である作者たちの意図する大きさが，きちんと子どもに伝わっているといえるだろう。

表1　実験1の結果

整理番号		整理番号	
年長児		年中児	
1	2	1	2
2	2	2	2
3	3	3	4
4	3	4	3
5	2	5	3
6	2	6	3
7	4	7	3
		8	2
		9	2
		10	3

本調査の際では，子どもたちにおいて「親指」という知識の有無が問題になるかと思ったのだが，親指がどの指かと聞き返してくる子どもはいなかった。これは，保育や家庭の関わりにある運動や食事，手洗い，入浴という日常と，子ども自身の発達段階にある自らの身体への興味関心が相まって，すでに自然と学んだものであったのだろう。

先に述べたように，今回は比喩的表現の原基として「親指」が使われていた。比喩的表現の理解は，それについての知識が規定するものである。つまり，そこで取り上げる例えは，受け手である子どもの知っているものでなければ比喩が成立しない。子どもたちにおいて比喩的表現の原基は，日常生活から獲得している。そうした知識が，ひいては国語的表現の理解を広げているのだといえよう。

２．実験２の結果と考察

実験2および実験3の結果を表2に示した。

年長児は，質問を理解して答えるものの長さはまちまちで，「大きい」といっても自分の両手を広げた域を出なかった。それでもテキストや図版を解釈し，自分なりのイメージを抱こうとする態度がみられた。例えば表中の「15センチ」と回答した子ども（年長児1）は，絵本の図版そのものの大きさを伝え

表2　実験2および実験3の結果

年長児			年中児		
整理番号	実験 2	実験 3	整理番号	実験 2	実験 3
1	15cm 本を計った	162cm	1	330cm 部屋の端まで行った	
2	125cm	※	2	194cm	196cm
3	100cm	168cm	3	72cm	184cm
4	400cm 部屋の端まで行った	210cm	4	170cm	175cm
5	50cm	210cm	5	28cm	280cm
6	160cm	190cm	6	90cm	165cm
7	180cm	225cm	7	96cm	120cm
			8	97cm	220cm
			9	97cm	128cm
			10	97cm	159cm

（※調査日欠席のため　記録なし）

えようとしたものである。年中児は，問いかけの際に質問者が例示した「両手を広げるポーズ」と同じにしたり，テキストの「とても　おおきい」を聞いて反射的に教室の端まで行ったりする子が多かった。

実験１については年長～年少を通して理解している子が多い中，「子ども2人分の長さを他者に伝える」という実験2の目的とする回答は，ほぼなかった。

本書における「ペリカンの大きさの伝え方」は，身近な「子ども」を原基にするなど，絵本表現として適切であったといえる。しかし，「とても　おおきい」というテキストと，「子どもが2人手をつないでいる」という図版による比喩的表現を合わせても，それだけではその情報を理解して他者に伝えるということが難しいようであった。

このことから，絵本表現として「平易な文章」「わかりやすい比較図」に配慮しても，「2人分」「3人分」といった絵本から自分の身体を越える大きさの場合，国語的理解に加えて，数学的理解と解釈が加わってくるため，それを具体的に実感し，他者に伝えるということは難しいのではないかと思われる。

子どもは，「どれくらいだと思う？」という問いかけに対して，まず「これくらい」と手を広げて示す場合が多かった。そしてそれから，長さを調査者である筆者に教えてくれた。つまり子どもにとって，人に伝えられる最大の大きさとは「手を広げた大きさ」であり，自分一個の身体を越えるスケールの場合は，大きいということは理解しているように見えるものの，「これより大きい」という範疇に入ってしまうのではないかと推察される。

この考察を受けて，ペリカンの大きさを具体的に理解してもらうために実験2の手法を一部改め，以下の試みを行った。全員に行えなかったのは，調査日の出欠等に関わる問題からである。

３．実験３の結果と考察

調査の結果を表2の「実験3」に示した。

本書にある「2メートル50センチ」という厳密な数字にはならないが，実験2のときにくらべ，絵本が伝えようとしている長さに近い数字となった。絵本にあった「子どもが2人手をつなぐ」という図版を実際に再現することで，その大きさに対する直観的な理解が得られたといえる。

このことから，絵本表現からでは困難であったろう自分の身体を越える大きさの理解と伝達は，絵本における比喩的表現の再現を体感することによって，理解を深めることができたといえよう。

本書のような「科学絵本」は，子どもを対象にしたものではあるが，それゆえに正確な情報の記載を旨としている。大きさや重さについて，単位も含めた数値を載せることは簡単だが，それが対象である子どもの理解に至るかどうかが問題である。

子ども向けの図鑑では，本書のような比喩的表現が多くみられる。例えば「何人もの子どもが手をつないで囲む巨木の太さ」[7]であるとか「天秤ばかりの上に乗った子どもたちとゾウとの重さくらべ」[8]などである。そうしたテキストと図版をさっと見るだけでも，漠然とした大きさや重さをイメージすることは可能であろうが，それを国語的理解，数学的理解に基づいて読み解き，実際の大きさや重さを具体的にイメージすることは，子ども自身に大きな驚きと興味関心を呼び起こすと思われる。

そうした態度を培う上でも，比喩的表現において子ども自身以上の大きさを実感させるには，読み与えるのみでなく，絵本にあるテキストや図版の再現による体感が有効であろうと考える。

Ⅳ．まとめ

絵本を通して，そこに描かれているものの実在を想起する，未知のものが既知のものになるということは大いにある。しかし，色やかたちはともかく，大きさや重さを伝えるには，数値による表記以外では，テキストや描写を用いた比喩的表現によるところが大きい。

例えば大きさについては，「おおきい　ぞう」は，大きく見えるように描かれ，「ちいさな　ねずみ」は，小さく見えるように描かれている。具体的な数値による表記がなくとも，絵本は「描写」と「テキスト」の双方を駆使し，対象者の発達に配慮した大きさの伝え方をしようとしている。

そして，伝えたいものが「とても　おおきい」「とても　ちいさい」といった漠然としたもので十分なのであればそこにこだわることはないが，物語の進行上，または科学絵本という性格においてなど，必然の伴う具体的なイメージがある場合は，それを子どもの理解に落ちるかたちで伝える必要がある。

本稿の実験1でも，用いた場面には「手のひらの上に立つ男の子」が描かれており，一見して「小さい」ということが伝わってくる。それに重ねて，「それは　ちいさい　ちいさい　おとこのこで，からだのおおきさが　おやゆびくらいしか　ありません」と

いうテキストが添えられている。

この場面の描写に基づく理解を「ビジュアルからの理解」とし，ここにはないが例えば「5センチ」といった数値による理解を「数学的理解」とするなら，テキストによる比喩的表現による理解は「国語的理解」ということができよう。今回取り上げた絵本では，この国語的理解が，絵本にある物語の像をより具体的にし，身近なものにしていると考える。

本稿においては，絵本の中にある「大きさ」を一つのテーマとして取り上げ，比喩的表現のうち，身体を原基とした場合の伝わり方を調査した。

実験1では，身体のうち「親指」を取り上げ，子どもが自身のそれを原基として，登場人物の大きさをイメージすることができているということを確かめた。

実験2では，「2人分の長さ」という絵本的表現のみでは，子どもにとって数学的概念が未発達であったためであろうか，それを読み解き，大きさを具体的に意識することができないということを確かめた。

実験3では，「2人分の長さ」という絵本的表現から与えられる大きさのイメージが，実寸の提示によって，その理解を深めるということが確かめられた。

上記の結果を考察し，以下にまとめる。

（1）　子どもは，既知のものを原基とした場合，それを用いたテキストによる大きさの比喩的表現を理解し，他者に伝えることができる。
（2）　子どもは，既知のものが原基であっても，自身の身体を持って表現できる以上の大きさの場合，具体的にその大きさの解釈し，他者に伝えることが難しい。
（3）　しかし（2）の条件下にあっても，図版やテキストに基づいて実際に復元した大きさを見たときは，その大きさを理解し，他者に伝えることができる。

今回の調査中，対象であった施設の保育士から「子どもにとっては『大きい』という事が大事なのであって，実際の大きさというものは問題にしていないのではないか」という意見があった。それも一つの理解ではあるが，例えば「子ども10人が手をつないだ幹の太さ」というテキストの事例に対して，実演することで得られるであろう驚きや経験は有益なものと思われる。

近年，百科事典，図鑑が売れないといわれる中で，版を重ねて話題になった小学生向けの図鑑に『くらべる図鑑　小学館の図鑑NEOプラス』（小学館刊）[7]がある。これは動物，地理，天文といった，様々なジャンルを横断的にいろいろな角度から比較していくという趣旨を持った一冊で，5歳児の立像から始まり，世界最大の動物，太陽の大きさ，世界の子どもの暮らしにまで内容が広がっていくものである。こうしたイラストや写真を用いた比較図とテキストを見比べながら，具体的な実感と感情を持って本を読み解いていく力は，今回の絵本にあるような比喩的表現の解釈，国語的理解の延長線上にあるものであろう。絵本のテキストや図版からイメージする。こうした理解力の拡大は，自分の関わるこの世界の認識を豊かにするものであるといえよう。

今回は親指であったが，大きさを導く比喩的表現の原基になりうるものはそればかりではない。例えば，自らの身体にある「手」「足」「口」「目」であり，食材にある「豆」や「リンゴ」などといった存在である。大きさに限らず，こうしたものの色，かたち，重さなどを言語によって具体的に意識することは，絵本が伝えようとする比喩的表現，国語的理解を深める一助となるものである。いずれかのとき補助的な図版を伴わないテキストのみと出会っても，言語空間から伝えたいもののイメージを引き出す力となるであろう。

このように，絵本における国語的，比喩的表現の理解は，日常の生活における習慣や興味関心を基にした部分が大きくあるといえる。実利としての芽吹きがいつあるのかわからないとしても，子どもにとっての QOL（Quality of life）を心がけつつ，生活習慣の定着と興味関心の拡大が，今後の豊かな国語的表現活動につながるといえるだろう。

Ⅴ．今後の課題

絵本における比喩的表現は「大きさ」の表現以外にも多様に使われる。数学的・数量的な比喩ばかりではなく，国語的・質的な比喩も子どもたちはどのように受け止めているのであろうか。それら比喩全般に関しての表現を考える上でも，まず数量的な比喩について，こどもの理解をはっきり知ることは有用であろう。

今後の課題としては「時間感覚に対する配慮」をあげたい。物語の進行上，時間や年月を示す単語，

単位を交えて伝えなければならない場面がある中で，絵本は，そうしたものをまだ十分に理解できていない子どもに対し，どのような表現をしているのであろうか。

時間の経過というものが魅力的な絵本もある中，時期をみて，自作も交えつつそれについても論考してみたい。

註

1) 今泉忠明監修 (1984) 学研の観察図鑑 6　動物　学研，東京
2) 成島悦雄監修 (2008) 小学館の図鑑 NEO　原寸大どうぶつ館，小学館，東京
3) 大川悦生文，長谷川知子絵 (1978)でっかいまめたろう，ポプラ社，東京
4) 山本忠敬 (1976) 年少版こどものとも　おおきいものは？，福音館書店，東京
5) 石井桃子文，秋野不矩絵 (1965)いっすんぼうし，福音館書店，東京
6) あべ弘士（1993）どうぶつえんガイド／カメはおうちをしょっている，福音館書店，東京
7) 今泉忠明監修（2010）ニューワイド学研の図鑑 i　いちばんの図鑑，学研，東京
8) 五味太郎（1976）ぼくはぞうだ，福音館書店，東京
9)渡部潤一監修（2009）小学館の図鑑 NEO プラス　くらべる図鑑，小学館，東京

文 献

佐々木宏子 (1989) 増補　絵本と想像性，高文堂出版社，東京
佐々木宏子 (2000) 絵本の心理学，新曜社，東京
高浜介二，秋葉英則，横田昌子 (1984) 年齢別保育講座，あゆみ出版，東京
藤本朝巳 (1999) 絵本はいかに描かれるか，日本エディタースクール出版部，東京
松居直 (1973) 絵本とは何か，日本エディタースクール出版部，東京

Bulletin of Nayoro City University **9**: 91-97 (2015)

Original paper

Figurations' in Picture Books:

How Children Understand the Figurations of 'Sizes'?

Makoto HORIKAWA[1)], Michihiro KONNO[2)]

[1)]Asahikawa Welfare College
[2)]Department of Early Childhood Care and Education, Nayoro City University Junior College

***Abstract*:** Figurative speech is often used in children's picture books. This is not merely a literary device but can also serve to facilitate understanding of the content for the intended audience of children readers. In such cases, the child readers' knowledge, experience and vocabulary must be carefully considered when selecting appropriate language. From the perspective of a creator of children's picture books, a study was conducted to determine the ways in which children understand such figurative speech by reading them a text containing the expressions "small things" and "large things", then having them act out their perceptions of size with their bodies

***Key words*:** picture books, comprehension of children, figurations

Received October 31, 2014; Accepted February 19, 2015
*Corresponding authour (E-mail: YQW10364@nifty.ne.jp)